Morio MOROZUMI and Tadasu SAKAKI: Medical Analysis
on Rural Welfare of Naguri-mura, Iruma-gun,
Saitama-Prefecture

Part II. On the Composition of the Population and
the Statistics of the Movement of Population

林業農村(埼玉県入間郡名栗村)の 農村厚生医学的研究

第2報 人口構成及び人口動態統計に就いて

東京医科大学農村厚生医学研究施設(主任: 柳沢文徳教授)

両 角 森 雄・榊

詢

緒 言

著者等は埼玉県入間郡名栗村に於いて、一連の農村厚生医学的研究を行つて居るが、其の第1報として、調査地の概要を報告し、自然的、人文的条件に就いて報告した。今回は引続き同村に於ける人口構成及び人口動態を調査検討中であつたが、その整理を終了したので、第2報としてその成績を報告する。既述の如く本村は埼玉県入間郡の西北に位し海拔249m、武甲山系に源を発して流れる名栗川が本村を縦断し、此れに沿つて幹線道路がありその両側に点在する15区分された部落よりなる。本村の農業経営の形態より観察すると、本村の主要農業である林業はその作業内容より、労働は男子に限定されて、女子は僅に存在する畑の仕事に従事して居る。人口構成の調査研究に際して、産業上労働力の不定を補充するという意味で季節労働者が移入されることがあり、本研究所の徳山が調査した森林村である木租村(長野県)、岩井に依る柑橘栽培村である西浦村(静岡県)では此の現象が認められて居るので、此等の点も留意して調査吟味を加えたが、本村では全く季節労働者は

勿論のこと、近隣他村よりの労働力の補給ということは認められなかつた。

1) 常住人口

農村の人口構成を把握するには、常住人口の立場から之を調査するのがその目的を容易に達する方法であることは本研究室の岩井、香坂氏等により、詳細に検討報告されて来たので、著者等も又此の方法を踏襲した。即ち名栗村に定住し、世帯を設けてゐる居住民を対象とし、住民登録簿、その他村役場の資料に基き調査名簿を作製した上に、更に個々の資料を吟味するために世帯別の居住者の個表により調査名簿を作製して得られた実態について各種の分析を試みた。調査日を昭和31年4月1日現在とし、此の前後一定期間所定の目的をもつて離村して居る者も一応本村の常住人口と見做した。

総人口3421名(男子1701名、女子1720名)で、性別、年令別の実数、千分比、男女比は第1表に示す如くであつた。男女比に就いてみると平均女子100に対し男子は98.9で僅かに少くない。男子に比し女子が多いといふ事は、全口(男子96.6、女子100、昭和31年)並び

第1表 名栗村人口構成
(昭和31年4月1日現在)

年令	男 人数 千分比	女 人数 千分比	計 人数 千分比	男/女×100
0-4	187 108.9	181 105.2	368 107.6	103.3
5-9	202 118.8	210 122.1	412 120.4	96.2
10-14	188 110.5	182 105.8	370 108.2	103.3
15-19	111 65.3	123 71.5	234 68.4	90.2
20-24	98 57.6	112 65.1	210 61.4	87.5
25-29	132 77.6	129 75.0	261 76.3	102.3
30-34	126 74.1	126 73.3	252 73.7	100.0
35-39	119 70.0	97 56.4	216 63.1	122.7
40-44	76 44.7	77 44.8	153 44.7	98.7
45-49	89 51.7	76 44.2	164 47.9	115.8
50-54	84 49.4	82 47.7	166 48.5	102.4
55-59	91 53.5	73 42.4	164 47.9	124.7
60-64	73 42.9	84 54.7	157 45.9	86.9
65-69	59 34.7	64 37.3	123 36.0	92.2
70-74	32 18.8	48 27.9	80 23.4	66.7
75-79	26 15.3	31 18.0	57 16.7	83.9
80-	9 5.3	25 14.5	34 9.9	36.0
計	1701	1720	3421	98.9

に本研究室で調査した諸村と同様であるが、山川の宗像村93.3、香坂の96.2に比すれば本村の男子は多く、岩井の西浦村98.6に近似して居た。年令別に男女比をみると、24才迄は少々女子が多いが、25才頃から逆に男子が著名に多くなり、謂所農村の最も働き手の年令層では著名に男子の多いことを示してゐる。60才以上になると女が再び多くなり年令と共にその懸隔は著名となつて、80才以上では男子9名に対し女子25名と約3倍近く多くなつて居た。

年令別、性別実数をもつて示した人口構成は第2表及び第1図の如くであり之を百分率に

第1図 名栗村の人口構成(各才年令区分実数)
(昭和31年4月1日現在)

第2表 名栗村の人口構成(各才年令別)
(昭和31年4月1日現在)

年令	男 人数 千分比	女 人数 千分比	計 人数 千分比	男/女×100
0	30 22.340	32 18.605	62 20.462	118.75
1	26 17.285	36 20.930	62 18.123	87.77
2	34 19.988	39 22.674	73 21.339	87.77
3	41 24.103	34 19.767	75 21.923	120.30
4	48 28.219	40 23.556	88 23.723	120.00
5	47 27.637	39 22.575	86 25.339	102.57
6	37 21.932	37 21.515	74 21.631	102.00
7	40 23.516	30 18.070	70 20.893	125.00
8	42 24.691	30 18.005	72 20.897	125.00
9	36 20.976	32 18.405	68 19.385	109.39
10	35 19.871	32 18.405	67 18.708	102.00
11	32 18.570	34 19.767	66 19.244	108.22
12	36 20.164	43 25.000	79 23.093	83.72
13	33 19.400	29 15.116	62 17.246	126.97
14	17 9.924	21 12.209	38 11.105	89.95
15	24 14.697	27 15.791	51 13.739	89.54
16	23 14.697	29 16.860	52 15.785	89.59
17	23 14.697	27 15.791	50 15.200	92.59
18	18 10.392	25 14.535	43 12.569	72.00
19	17 9.924	21 12.209	38 11.105	89.95
20	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
21	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
22	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
23	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
24	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
25	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
26	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
27	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
28	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
29	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
30	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
31	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
32	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
33	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
34	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
35	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
36	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
37	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
38	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
39	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
40	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
41	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
42	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
43	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
44	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
45	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
46	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
47	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
48	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
49	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
50	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
51	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
52	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
53	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
54	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
55	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
56	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
57	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
58	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
59	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
60	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
61	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
62	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
63	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
64	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
65	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
66	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
67	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
68	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
69	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
70	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
71	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
72	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
73	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
74	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
75	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
76	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
77	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
78	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
79	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
80	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
81	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
82	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
83	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
84	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
85	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
86	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
87	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
88	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
89	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
90	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
以上	16 9.439	21 12.209	37 10.824	90.53
計	1701	1720	3421	98.90

平均年令 男 29.8 女 30.4

第2図 名栗村，全国の人口構成
(5才年令区分百分率)
(昭和31年 月 日現在)

して昭和31年の全口及埼玉県と比較すると第2図の如くであつた。即ち男女共に0~4才の間及び50才以上に於ては全国のそれより多いが、30~49才迄の最も働き手の年令層では男子は全国よりやはり多いが、女子は少ない。70才以上の全人口に対する比は男子1.9%、女子3.0%であり、80才以上では男子0.3%、女子0.8%であつて、本村は比較的長寿の村ともいえる。尚本村の12~16才の年令層における男女は共に他年令層に比し少くなつて居るが、之はやはり全国並びに他市町村と同様今次大戦の影響によるものと考えられた。直接の今次大戦による男子の被害年令々層に於ける変動は本村に於ては極めて微々たるもので男子の大戦による被害は甚軽微と思われた。

Ⅱ) 人口動態

人口動態の資料は、名栗村役場及飯能保健所に保管せる各種の材料を基礎におき、更に資料の正確を期するために各戸別に著者等が直接調査用紙を作り調査を実施した。資料の関係上、調査対象期間は昭和22年より同31年の10年間とした。資料の整理の方法は当研究室の岩井、山川氏の場合と同じであつた。

1) 人口の推移

昭和 22 年より 同 31 年迄の人口推移は第 3 表の如く、昭和 22 年の人口を 100 とすると、昭和 26 年迄は僅かに増加して来たが、その後全国とは逆に軽微ながら滞減し、昭和 31 年には 98.8 と本調査期間中最小を示した。而し本村

第3表 死口及び世帯数の推移
(昭和22年～昭和31年)

年度	人 数				平均	死亡率	出生率 ‰	铸 工 餐 食				国 际 人 口 指 数	
	支 队	指 数	支 队	指 数				支 队	指 数	支 队	指 数		
22年	3462	7000	1758	1000	1704	1000	103.2	703	4.9	2100453	1000	7810473	1000
23	3474	1004	1763	1003	1711	1004	103.0	701	5.0	2112500	1014	80002500	1024
24	3469	1002	1761	1002	1708	1002	103.1	699	5.0	2128800	1016	81772600	104.9
25	3466	1001	1760	1001	1706	1001	103.2	701	4.9	2144445	1022	83189837	106.3
26	3555	1027	1754	999	1701	999	103.1	702	5.1	2174000	1033	84573300	108.3
27	3456	998	1756	999	1703	999	103.1	702	4.9	2196000	104.6	83952000	109.9
28	3454	998	1754	999	1702	999	103.2	703	4.9	2220000	1057	87103300	111.4
29	3450	997	1742	991	1708	998	103.2	703	4.9	2246000	106.9	89293000	113.3
30	3491	1008	1767	1005	1724	1012	102.5	701	5.0	2262000	1077	90747400	114.3
31	3427	998	1701	969	1720	1009	99.9	699	4.9	2286000	1078	9253000	117.1

の人口増減の変動は極めて微々たるもので此の調査期間中に於ては認むべき変動はなかつたといふことが出来る。男女比の年次別変動をみると過去 10 年間男子は女子より多く、全国及本研究室の他村と異なる所であつて特に注目された、而し昭和 31 年に於ては女子が僅かに多くなつて居たのは一時的現象とも考えられるが詳かでわれない。世帯数の変動も又極めて僅かに増減を示して居るに過ぎない。此の事は純農村である泉村、宗像村の如く長男が家業を継続し次男以下は離村して新しい世帯を設けぬためとは簡単に言えきれないと考えられる。

2) 出生(出生率), 死產(死產率), 婚姻(婚姻率), 離婚(離婚率), 死亡(死亡率)

本村の出生、死産、婚姻、離婚、死亡の消長を第4表で示し、出生率、死亡率、乳児死亡

第4表 名栗村人口動態

(昭和25年～昭和31年の過去7年間)

出生数(率), 死亡数(率), 自然增加(率),
乳兒死亡数(率), 死産数(率), 婚姻数
(率), 離婚数(率)

年度	出生		死亡	自然增加	嬰兒死亡	生產	墮胎	餵奶
	嬰兒死亡	嬰兒死亡						
25年	93,268	50,144	43,124	5,303	5,537	32,92	1,028	1,028
26	100,781	32,92	67,189	27,500	1,100	25,70	1,028	1,028
27	84,263	30,86	54,129	27,238	0	29,83	1,028	1,028
28	73,211	32,92	41,118	42,273	3,410	27,98	3,086	3,086
29	76,220	30,87	45,133	53,567	6,789	26,75	1,028	1,028
30	71,203	29,83	42,120	42,563	8,385	17,48	1,028	1,028
31	57,149	37,108	14,141	42,382	2,642	28,81	1,429	1,429

※ 乳児死亡実数中()は新生児死亡実数

第 3 図 名栗村，全国，埼玉県の乳児死亡率
出生率及び死亡率の年次変動比較

率の全国及埼玉県との年次変動の比較を第3図として示した。本村全人口 1000 に対する出生率は昭和 26 年に 28.1 となつて増加して来たが、全国及埼玉県の雛勢と平行して昭和 27 年以後漸減し、昭和 31 年は 14.9 で本調査期間中の最小を示し全国及埼玉県に比し遙かに下廻つて居た。死亡に就いては別に項を改めて詳論するが、調査期間中の死亡率は人口 1000 に対し、昭和 25 年が最高 (14.4) で以後特に増減なく 9.2~8.3 の間にあつて埼玉県のそれよりは低く、全国の死亡率に略々近似していた。乳児死亡率は平均出生 1000 に対し 45 で全国に近似していたが、埼玉県のそれよりも可成り低かつた。而し昭和 25 年及 26 年では 53.7, 50.0 であつたものが次の 27 年, 28 年には半分に低下し、昭和 29 年, 30 年では再び急増して 65.7, 56.3 となり年次変動の差が著しかつた。死産率も又乳児死亡率と同様 10.0~84.5 の間にあり年次変動が著しい。而し 5 年間の平均死産率は 42 で全国及埼玉県に比し著しく低い値を示して居たことが判明した。此の様に乳児死亡率及死産率の年次変動の著しいこと並びに、乳児死亡の中でも新生児死亡が大部分を占めて居るという事実は死亡数そのものは比較的低い値であるとはいへ、あまりにも自然に流され過ぎて居り、まして婦人労働が特に要請されて居ない本村に於てかかる現象が認められた事は婦人の労働問題と

いうより、妊娠、分娩、補育の知識啓発指導がより一層重要視すべきであるとも考えられる諸点がある。

婚姻、離婚も表の如くで、昭和 25 年に婚姻が最高となつて居るのは今次大戦終了による一斉帰郷で結婚適令者の増加したための一時的現象と考察される。

3) 死 亡

人口構成より考察して、本村の死亡統計は聊か注目すべきものと考えて、2~3 の角度から稍々詳細に昭和 27 年~同 31 年の 5 年間に亘つて分析を試みた。5 年間に於ける死亡者総数の最も多いのは昭和 31 年で 37 名であつたが他の年は大体 29~32 の間にあつて、死亡率の低下という一般的な現象は本村ではあまり明かではないが、昭和 25 年以来段々改善されて来たかの如くみえる。尚昭和 25 年~同 31 年の 7 年間の死亡者合計は 241 名 (平均 34.4 名) であつた。

月別の死亡の状況は第 5 表の如く 11 月 12 月、特に 1 月 2 月に高く、最も低いのは 4 月であつた。

第 5 表 年度別，月別死亡状況
(昭和 27 年~ 31 年迄)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
昭和 27 年	5	5	2	1	3	2	3	3		1	1	4	30
28	4	4			1	2	4	3	3	3	4	4	32
29	5	5	2		3	3	1	3		1	4	3	30
30	4	3	1	1	2	1	2	6	2	2	3	2	29
31	7	5	6	4	1	2	1	3	6	4	3	3	37
5 年間の平均	20	22	11	2	13	9	12	16	8	13	16	16	158
5 年間の平均率	12.6	13.9	7.0	1.2	8.2	5.7	7.6	10.1	5.1	8.2	10.1	10.1	1000

年令別、性別による死亡者の状況は第 6 表に示した。先ず性別にみて 5 年間の統計では男子 84 名、女子 74 名で 5 年間の男女別の総人口に対する死亡率を一応算出すると男子 4.9, 女子 4.3 で多少女子の方が低い傾向を示した。之を昭和 30 年の宗像村 (純農村) に比すれば約半分の死亡率であつた。年令別にみると 5 年間の死亡総数 158 名の中、80 才以上は 36 名、70~74 才は 24 名、75~79 才は 20 名、65

第 6 表 年度別、性別、年令別死亡実数
(昭和 27 年～31 年)

年齢別	昭和27年		28		29		30		31		合 計 (5年間)		平均						
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女							
0	2	2	1	1	2	5	3	1	4	1	1	2	3	15	9.49				
1~4	1	1	1	1	2	2				1	1	3	2	5	3.16				
5~9												0	0	0					
10~14								1	1			0	1	1	0.63				
15~19												0	0	0					
20~24	1	1			1	1	1	1	2			3	1	4	2.53				
25~29	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	3	5	3.16				
30~34			1	1						1	1	1	1	2	2.27				
35~39	2	2										2	0	2	1.29				
40~44	1	1					1	1				2	0	2	1.27				
45~49							1	1	1	1	2	2	1	3	1.90				
50~54	1	1	1	1	2	2	1	1	2	1	1	2	3	5	8	5.06			
55~59	1	1	2	1	3	1	1	1	1			4	2	6	3.79				
60~64	2	2	1	1	1	2	2	2		1	1	2	6	8	5.06				
65~69	3	3	6	1	1	2	1	2	3	2	2	4	8	9	17	10.06			
70~74	2	1	3	2	3	5	1	4	3	2	5	3	3	6	11	13	24	13.21	
75~79	2	2	4	4	1	2	3	3	3	7	1	8	13	7	20	42	66		
80~	4	3	7	4	7	11	4	1	5	1	3	4	3	6	9	16	20	36	22.78
計	19	11	30	12	20	32	16	14	30	16	13	29	21	66	37	84	74	159	20.32

～69 は 17 名、次で乳児の 15 名 (内新生児 12 名) の順であつた。即ち本村の死亡者は 60 才以上の高令者と生活力薄弱な新生児に集中的に見られることが判明した。

死亡の原因統計 (国際分類法) は第 7 表に示した。老衰を含む XVI 型は 49 名で最も多く、脳溢血を含む VI 型の 25 名、伝染病 及 寄生虫

第 7 表 国際分類による年度別、死因別実数
(昭和 27～31 年)

死因別	昭和 27 年	28	29	30	31 年	合 計 (5年間)	平均
死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別
I 伝染病、寄生虫	2	3	2	4	1	12	7.59
II 新生児	4	2	2	3	1	12	7.59
III アルバ、内分泌				1		1	0.63
IV 血液、造血系							
V 精神、神経系			3			3	1.90
VI 神経、感覚系	4	5	4	2	10	25	15.82
VII 循環系	4		2	2	3	11	6.96
VIII 呼吸系	2	1		2		5	3.16
IX 消化系	1	2		5	2	10	6.33
X 泌尿、生殖器			4			4	2.53
XI 分娩、産褥	1					1	0.63
XII 皮膚、結合組織							
XIII 骨、運動系							
XIV 先天奇型		1	1		1	3	1.90
XV 新生児主要疾患	2	1	5	2	2	12	7.59
XVI 老衰、症状不明	10	10	9	5	15	49	31.04
XVII 不慮の事故、外傷 (外因)	1	1	2	1	1	6	3.80
XVIII " " (内因)			1	2	1	4	2.53
合 計	30	32	30	29	37	158	102.00

第 8 表 年令別、性別、死因別死亡者分布
(昭和 27～31 年の 5 年間)

年令別	昭和 27 年	28	29	30	31 年	合 計 (5年間)	平均
死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別	死 因 別
0	2	2	1	1	2	5	3
1~4	1	1	1	1	2	5	3
5~9						0	0
10~14						0	0
15~19						0	0
20~24	1					1	1
25~29	1	1	1	1	1	5	3
30~34	1					1	1
35~39	1					1	1
40~44						0	0
45~49						0	0
50~54	1	1	2	2	1	7	4
55~59	1	2	1	3	1	8	5
60~64	2	2	1	1	1	6	3
65~69	3	3	6	1	2	15	9
70~74	2	1	3	2	3	11	7
75~79	2	2	4	4	1	13	8
80~	4	3	7	4	7	25	16
計	19	11	30	12	20	82	52

病、新生物、新生児主要疾患の各 12 名、循環器系の 11 名、消化器系及び不慮の外傷、事故の各 10 名の順であつた。死因を年令別、性別にみると第 8 表の如く、男子の第 1 位は老衰を含む XVI, 2 位が脳溢血を含む VI, 3 位は新生児疾患の XV, 4 位は不慮の外傷、事故の XVII 及伝染病、寄生虫病の I 型の順であつた。女子の第 1 位及び第 2 位は男子と同様であるが、3 位に新生物の II 型、4 位が伝染病、寄生虫病の I 型、循環器系、消化器系の各疾患の順であつた。次に本村の特定死因別、性別発現順位は第 9 表の如く男子では第 1 位が老衰、第 2 位は新生児疾患、3 位は脳溢血、脳軟化症を含む中枢神経系の血管損傷であり 4 位は不慮の事故外傷であつた。女子では第 1 位は男子と同様老衰であつたが、第 2 位は中枢神経系の血管損傷、3 位は悪性新生物、4 位は心臓疾患であつた。

総括並びに考案

人口構成

1) 常住人口

名栗村の人口は最近 10 年間大体 3421~3491 名の間にあつて、その増減は極めて微々たるものであるが昭和 31 年は此の中最低を示した。昭和 31 年の男女の比は女子 100 に対し男子は 98.9 であつたが之は過去 10 年間始めてみられた現象で他の年次は常に男子は女子に比し優位を占めていた。而し 31 年の男子 98.9 は全国の男子 96.6 より上廻つて居り、又季節労働者を入れて居る西浦村と近似していた。同じ林業村で且つ季節労働者を入れて居る木租村の 95.3 及純農村である泉村、宗像村よりも高い値である。此の様に他村に比して男子が多いといふことは本村の林業労働力が全く他に依存せず、必然的に男子の在村、就労を要請されるためではないかと考えられる。本村の平均年齢は男子 29.8 才、女子 30.4 才にして、本研究室で調査された諸結果と比較検討すると、その調査年度は多少異なるとは言え、安中村男子 26.0 才、女子 26.4 才、林業村である木租村は男子 26.0 才、女子 26.4 才、海浜、柑橘栽培村である西浦村は男子 27.4 才、女子 30.1 才で此のいづれよりも本村の男女は高い値であつて、山川の純農村宗像村の男子 29.8 才、女子 30.9 才に近似して居た。此の一事をもつて直ちに他村より優れた村であるとは言えないが、やはり高令者が多いことを示して居る。

2) 人口構成

全口的傾向として最近 4~5 年間に出生は急に減少して来て居り、年度によつてその人口構成が異なるので、此の問題に関する限りでは調査年度を異にして居る他村の結果と直ちに比較することは困難である。昭和 31 年の全国のそれと本村を比較考察するに、全口と同様 4 才から 0 才に行くにつれて漸減して来て居ることは他村と同様であり、此の事は近時妊娠調節又は中絶が農村迄漸く浸透して来た結果と考えられた。又男女共に 12~16 才に於ける人口が少いこと、及び 32~33 才、42~45 才の男子が女子に比し減少して居るのはやはり今次大戦の影響として全国並びに本研究室の他村の調査結果と同様であつたが、本村のそれは特に著しいものではなかつた。前述した如く 50 才以上の男女は共に全国より多いが 30~49 才の謂所農村の働き手の年齢層に於ける男女は各々全国のそれと興味ある対比を示し、本村の此の年齢層の男子は全国より多いのに反し、女子は全国より減少を示して居た。而も平均男女比に於て女子 100 に対し男子 98.9 で男子が少くなつて居るのに働き手の各々年齢層ではいづれも男子 100.0~124.6 の間にあつて男子が多くなつて居る。此の事は過去 10 年間常に男子が多かつたという本村の人口の傾向と共に、全国及び他村とは著しく異なる所である。之は本村が労働力の補給を全く他に依存せず専ら村民男子に依つてゐるという林業経営、及び耕地面積が少く女手間で間に合う程度の畑仕事しかなく女子労働力

が余るといふ事、更に隣接地に織物工場等を有する青梅市、秩父市等を控えていることなどの地理的、人文的条件に支配されて居るためではないかと解釈された。従つて本村の転出入は殆んどが村民のみであつた。

第 9 表 名栗村の特定死因別死亡順位

性別	主 要 死 因 順 位 (特定死因別)			
	1 位	2 位	3 位	4 位
男 子	老衰	新生児主要疾患	脳 溢 血	不慮の事故、外傷
女 子	老衰	脳 溢 血	悪性新生物	心 臓 疾 患
全 村	老衰	脳 溢 血	悪性新生物 新生児主要疾患	心 臓 疾 患

人口動態

本村の過去10年間の人口総数の変動は極めて軽微である。昭和31年の人口が此の中最低を示したが之は妊娠調節による出生の減少に伴う自然増加が著しく(4.1%)低下した為であろう。年次別男女比の変動は極めて興味あることとして既に述べた所であり男子の多い村であつた。又世帯数の増減の変動も又、一世帯当りの構成人員の年次変動も少く恒常性を示した。出生率、死亡率の変動は共に昭和31年を除いては埼玉県より低く、大体全国のそれに近似して居つて、年次の進むにつれて漸減しつつある。過去5年間の乳児死亡率、死産率は全国及び埼玉県に比し特に高率とは言えぬが共に年次変動の巾が大きいこと、及び新生児死亡の多い点が注目された。乳児特に新生児の死亡が高率である原因は軽率に言及することは出来ぬが、女子の本村に於ける労働量から考察して、本原因は産児の哺育の知識の低劣である一面によるものではないかと批判される点が本調査の結果より得られた。本村の死亡者は65才以上の高令者及び新生児に多く青壮年には少ないことが判明した。本村の死因第1位は老衰(266.3)、2位脳溢血(144.7)、3位新生児疾患(75.2)、4位悪性新生物(69.4)、5位は不慮の外傷事故(57.9)の順であつた。之を対人口10万に就いて全国及び埼玉県の死亡順位と比較してみると老衰は全国では3位(75.8)、埼玉県では第5位(9'09)、脳溢血は全国1位(148.4)、埼玉県もやはり1位で174.9であつた。新生児疾患は全国では8位(30.5)、埼玉県6位(42.1)、悪性新生物は全国は2位(90.7)、埼玉県でも同じく2位(96.8)、不慮の外傷、事故は全国では7位(36.8)、埼玉県は9位(33.4)となつて居り、本村の不慮の外傷事故は57.9と、新生児疾患の75.2は略々全国の2倍にも達し且つ各々男子主要死因の第4位及第2位を占めていることは林業を主とする本村の主要死因

の2大特徴として注目される。更に又本統計に於て僅か1名ではあるが喘息による死亡がみられたことは本村が森林村であるということから聊か著者等の注目を惹いた。然し徳山はやはり森林村である木租村に於て喘息を含むⅢ型が人口1万対3.36と報告して居るのに比すれば遙かに少いものであつた。全結核の死亡は全国及埼玉県では夫々48.6(5位)、36.8(8位)となつて居るが本村に於ては28.9で非常に少ない。老衰並びに脳溢血は又全国及び埼玉県に比して極めて高く種々のFactorを思慮する必要があるが他農山村と比較して本村わ特に高い地域ということとは出来ない。老衰及び脳溢血の性別に就いてみると、老衰は全国と同様本村に於ても稍々女子に多いが、脳溢血は全国では男子に多いのに本村では女子に高い。尚本村の5年間の死亡統計に於て、血液造血器系疾患及び皮膚結合組織疾患、骨、運動器系疾患の死亡は全く認められなかつた。

結 論

埼玉県入間郡名栗村の最近の人口構成、人口動態につき調査研究した成績を分析した結果をもつて、本村の健康状況を即断することは出来ぬが、調査成績に基いて総括を試みる。

本村は耕地面積が非常に少く、水田は全くない。主食は他に依存して居り、畑といつても甘藷、馬鈴藷、麦等が主であるが生産量わ少く自給自足は野菜すら出来ぬ現状である。本村の生計は主に林業に依存して居り、苗木育成、植林、枝打ち、筏木、搬出等はことごとく村民の手でまかなわれ、他村よりの労働力の補給は全くなく、生活は安定し、比較的富裕村と言うことが出来る。生産人口に就て男子と女子の比が他の年令層に比較して高いのは男子の労働力の要求に基くものと考えられる。死亡率は全国に比して低く、死因は林業に伴う事故死、老衰、乳児死亡が多く、結核が少いという結果が得られた。特に作業に伴う事故死を除去すれば更に死亡率の低下が

期待される訳けであつて、本村の林業作業に伴う罹病、疲労の問題は極めて興味があると考え、目下更に検討を重ねて居るので後に更に詳細なる報告をする。人口構成、死亡統計より考察すると本村は高令者が多く、必然的に平均年令も高く、高令者の死因も脳血管損傷よりも老衰の死亡率が高いことを考えると、本村は一応健康地とも称し得ることも出来よう。一方乳児死亡率が高いのは環境条件による要因よりもむしろ衛生思想の欠除によるものが多いことが考察されるので此の面より本村を非健康地と称することは出来ぬと考える。

稿を終るに当り種々の御教示を戴いた宮本璋教授並びに終始御懇篤な御指導と御稿閲を戴いた恩師柳沢文徳教授に心から御礼申し上げますと共に、本研究に種々援助と協力を惜まれなかつた名栗村役場職員諸氏及び名栗診療所の諸氏に厚く感謝の意を表する。

参 考 文 献

- 1) 山川：宗像村農村厚生医学的研究，お茶の水医誌Ⅵ，3. (1958)
- 2) 香坂：お茶の水医誌Ⅵ，4. (1958)
- 3) 厚生省大臣官房統計調査部編：昭和 31 年人口動態統計，上，下巻．
- 4) 岩井：お茶の水医誌Ⅳ，3. (1956)
- 5) 岩井：お茶の水医誌Ⅳ，3. (1956)
- 6) 徳山他：お茶の水医誌Ⅲ，2. (1955)
- 7) 榊，両角：名栗村の農村厚生医学的研究（第 1 報 調査地の概況 本紙掲載）

Medical Analysis on Rural Welfare at Naguri-mura, Iruma
-gun, Saitama Prefecture

Part I. General Survey at the Research Area

By

Tadasu SAKAKI and Morio M

The site selected for the studies was Naguri-mura located in the northwest by west of Iruma gun, Saitama prefecture.

This Village was surrounded by dismembered mountains, branches of the Buko, and had 59.5 km² in area, and the above sealevel 249 m. A babbling brook, the Naguri streamed down the center of it, as turning. According to our investigation on April 1956, the number of households were 699, and the population 3421.

The weather was variably. The variably. The mean maximum, mean minimum and mean temperature of the year round was 19.1°C, 7.2°C and 12.4°C.

The region belonged in the rains in Saitama prefecture. As industry, the superior timbers of Japanese cedar and Japanese cypress were main products, The quantities of this products a year were 100,000 koku (Japanese).

The forest of this Village were occupied about 94 percent of its area. There was little ricefield.

Some of this Villagers was farmers, while many engaged in the forest work.

(From the Institute of Medical Research for Rural Welfare,

Tokyo Medical & Dental University, Tokyo)

Medical Analysis on Rural Welfare of Naguri-mura, Iruma
-gun, Saitama-Prefecture

Part II. On the Composition of the Population and
the Statistics of the Movement of Population

By

Morio MOROZUMI and Tadasu SAKAKI

The authors have been engaging in a survey of the composition of the population at Naguri-mura, Iruma-gun, Saitama Prefecture, and in compiling statistics of the movement of the population at that village. The major industry is forestry. The following report is submitted as the result of the study:

1. The increase or decrease of the population in the last 10 years (1947~1956) was barely noticeable. The least population was 3421 as of 1 April 56, while the most was 3491. The ratio between female and male was 100:98.9 in 1956. The rest of the years in the last 10 years, the records indicate that the male population was always a little more than the female.

2. As to the composition of the adult population aged between 25 and 50 years,

as of 1 April 1956, the male population remarkably larger than that of the female, however, female population increased as the ages went up. This is considered to be caused by the attraction of the major industry, forestry, to the male population.

3. The age group 0~4 years is considerably decreased to 10.7%. This means some form of birth control gradually has been adopted by village people. The age group 12~16 years was not too small a group, and it was believed that effect of WW II indirectly resulted in the increase of the population in this group.

4. The statistics of the movement of the population of last 10 years (1947~1956) are as follows:

a. The variation of population and number of household was hardly seen.

b. The birth rate was similar to that of Japan wide average and indicated as 24% and decreased since 1952. The birth rate of 1956 was 14.9%.

c. The death rate showed at its peak 14.4% at 1951 and decreased since then, showing 9.2~8.3%. These figures resemble that of the average in Japan. The deaths occurred mostly in January and February of the year, and most of the victims were in ages over 60 years, or were new born babies. The itemized summary of the causes are as follows:

- For male:
1. Deceit
 2. Disease of infant
 3. Apoplexy
 4. External injury by accident.

- For Female:
1. Deceit
 2. Apoplexy
 3. Malignant tumor
 4. Heart disease.

d. The average death of the infant was 4.5% which was close to the average rate of Japan, yet it was lower than Saitama Prefecture as a whole. The rate varied greatly according to the year, however, most of the cases were the deaths of new born babies. This fact introduced the idea that lack of hygienic knowledge rather than the environment of this village is a major factor.

e. The still birth rate was between 10.0~84.5 as observed in infant death rate and this rate varied so much according to the year.

f. The fluctuation of marriage rate and divorce rate were not too noticeable.

(From the Institute of Medical Research for Rural Welfare, Tokyo

Medical & Dental University, Tokyo)